

## 別紙1 (博士論文の審査結果の要旨)

専攻名 システム創成科学専攻

氏名 川池 智子

### 要旨

子どもが障害をもった時、最初に障害に向き合うのは、障害を持つ本人ではなく、親(家族)であるにも関わらず、親(家族)の社会的支援について論議されることが極めて少なかった。

以上のような問題意識を持つ本研究は、子育て初期の障害児をもつ親のニーズを分析し、その実態とニーズの課題を明らかにすることを目的としている。また本研究は、「子どもの障がいと向き合う子育て初期、育児・ケア・療育という重層的な役割を担わなければならない障害児の親は、システムとしての協働的な社会的支援を必要とする。」といった仮説から出発している。なお、本研究は、研究プロセス全体に定量的、定性的調査・分析を組み込む研究手法をとっている。本研究は第5章の構成である。章ごとの概要は以下の通りである。

第1章では、研究の背景として、障害児の親(家族)支援の政策動向と研究動向を概観し課題を論じた。

第2章では、障害児・者の母親の7事例をトランスクリプトのエピソードの再構成とタイトルづけを通して読み込み、さらに注目されたキーワードをテキストマイニングソフトで文脈探索するという分析方法をとった。分析結果からは、20歳代から80歳代の母親まで半世紀以上の違いがあるにもかかわらず、問題の本質が変わっていないこと、同時に家族のそれぞれの条件等と社会的支援ニーズの関係が考察された。

第3章では障害児の親の満足度に着目した分析を行った。満足度項目ごとに自由記述の設問を設けた2011年調査(回収票184)の自由記述の分類、テキストマイニングと文脈探索を用いた分類を行った。

第4章では、2006年調査(回収票576)、2012年調査(回収票505)結果を、テキストマイニングと文脈探索・質的統合という手法で分析した。2006年調査の調査対象は障害をもつ幼児から成人までの保護者であり、2012年は就学前の子どもの親を対象としている。さらに調査時期と年代の差があり、調査票の項目も異なることから、分析結果の内容は相当異なるであろうと予測していたが、むしろ、類似点が大きかった。

①何をどうしたらよいかもわからなかったが、支援が得られなかった、②先の見通しがつかず不安だった等は共通であり、県レベルの専門機関が支援した時代と市町村主体の時代背景、子どもの年齢が相違を齎した。特に注目されたのは「親亡き後」の不安である。慣用句のようになった「親亡き後」が幼児期の親にも大きい、10代の子どもの親のそれとはかなり意味が異なる事も確認された。漠然とした不安ではあるが、幼児期からの「親亡き後」の不安を「超えるべきもの」「受容すべきもの」という捉え方はできない。社会的支援の課題として再検討すべきところである。

なお、親の会というインフォーマルな組織への支援のニーズはフォーマルなそれとの関係、比較のために検討した。テキストマイニングの手法において抽出された頻出構成要素と文脈から、フォーマルグループの意義と課題も浮かび上がってきた。

第5章では、総括として、親(家族)の社会的支援ニーズについて考察した。まず、社会的支援に対する親たちの主張・回答・記述(第2～第4章)を統合して抽出されたキーフレーズを根拠として、「仮説」を検証した。

次に親たちの主張・回答・記述を統合化して社会的支援ニーズを類型化した。10類型を三つの大分類にしたものである。大分類は《子育ての支援ニーズ》、《家族(親と子)共通の支援ニーズ》、《親の支援ニーズ》であり、10分類は例示すると、《子育ての伴走のニーズ》、《オリエンテーションのニーズ》、《協

働的支援のニーズ)、〈表出支援のニーズ〉等である。類型化によって、親たちが求めてきたことを俯瞰することができた。類型化されたニーズは、「障害児の親」への特別な配慮を要請するものであった。

川池智子氏の研究は、社会福祉学の研究において、子育て初期の障害児をもつ親のニーズを実証的に分析したところに、研究の理論的オリジナリティーがある。またこの分析結果に基づいて、社会的支援のあり方についても新たな提案をしているが、これからこの研究の実践が期待される場所である。

以上の博士論文に対して、平成27年1月20日に審査員による確認を行った。その結果を踏まえて平成27年2月10日に実施した公聴会において種々の質問がなされ、いずれも著者の説明により質問者の理解が得られた。また平成27年1月20日に審査員による確認で指摘された修正意見に対しても公聴会までに十分な修正を行って審査員の理解を得ることができた。

また、研究指導実績報告書に基づき研究指導が適切に行われていることを確認した。

以上の審査結果に基づき、本論文は博士(学術)の学位を授与するに値すると判断され、審査委員全員一致で合格と判定した。

別紙2 (最終試験の審査結果の要旨)

専攻名 システム創成科学専攻

氏名 川池 智子

学位申請者、川池智子氏に対して、博士論文審査終了後に最終試験を実施すること、および試験の内容は博士論文に関連する内容について口述試験を行うことを事前に通知し、平成27年2月10日に文教2号館2階共同会議室において実施した。

口述試験は、博士論文(「家族の社会的支援ニーズに関するミックスドメソッドアプローチ—テキストマイニングによる障害児の親の記述データ分析を中心として—」)を中心として、特に障害児の概念、社会的ニーズの主観性と客観性の関係、インタビューや質問紙調査の内容等について行われたが、申請者自身の研究成果を踏まえた適切な説明がなされた。なお、最終試験において、申請者は、社会福祉学に関する十分な知識と理論構成力を有していると判断した。

本申請者に対するこのような評価に基づいて、5名の審査委員は、試験の結果は合格であると判定した。